

方言イメージの形成

永瀬 治郎

1. 研究目的

昔から方言に対するいろいろなイメージがある。そのイメージは方言の言語的な特徴などとは直接的に関係ないその方言や方言の使われている地域の印象などによって作られるあまり根拠の明白でないものである。それらは優しい、汚い、あったかいなどの評価が各地の方言について行われてきた。このように方言の言語的な特徴に基づいていないイメージをステレオタイプというが、この研究は各地の方言についてのステレオタイプとしてのイメージがどのようなものであるかを解明する研究である。この研究では、全国の9つの方言と標準語についてのイメージを27語の評価語対より高校生と保護者に評価してもらい、そこから創られるステレオタイプとしての各方言のイメージがどのようなものを明らかにしようとする試みである。また、先行研究を参考にして、ステレオタイプの変化があるのかどうかについても検討を行う。

2. 調査概要

2011年から2012年にかけて、上記の目的でアンケート調査を行った。調査地域は京都、名古屋、東京（杉並と狛江）、茨城、青森の6か所である。それぞれの地域の高校生徒とその保護者に対して用意した方言についてSD法で用いる評価語により5段階評価をしてもらった。

2.1 インフォーマント

アンケート調査に答えてくれた方々は京都では京都堀川高校の生徒30名と保護者20名、愛知県では豊川高校の生徒30名（保護者のデータは得られなかった）、茨城では緑川高校の生徒43名、保護者35名、東京は二か所で、杉並区の日大付属鶴ヶ丘高校の生徒の20名、保護者20名である。もう一つは世田

谷区の都立狛江高校の生徒41名と保護者20名である。青森では三沢高校の生徒45名と保護者30名である。これらの地域は近畿、中部、東京、北関東、東北で、近畿から東北までをカバーするために選択した。

2.2 調査票

各方言はSD法で使用されている対の評価語27対によって評価された。それらの評価語対は次の通りである。①「ぞんざい-丁寧」、②「悪い言葉-良い言葉」、③「汚い-きれい」、④「大声-小声」、⑤「乱暴-おおらか」、⑥「好き-嫌い」、⑦「冷たい-温かい」、⑧「暗い-明るい」、⑨「親しみにくい-親しみやすい」、⑩「厳しい-優しい」、⑪「重苦しい-軽快」、⑫「聞き取りにくい-聞き取りやすい」、⑬「非能率的-能率的」、⑭「標準語に遠い-標準語に近い」、⑮「くどい-あっさり」、⑯「遅い-速い」、⑰「昔の言葉を使う-昔の言葉を使わない」、⑱「大雑把-繊細」、⑲「田舎-都会」、⑳「粗野な-洗練されている」、㉑「地味-派手」、㉒「歯切れが悪い-歯切れがいい」、㉓「固い-柔らかい」、㉔「味が無い-味がある」、㉕「深みがない-深みがない」、㉖「話したいと思わない-話したいと思う」、㉗「聞くことで癒されない-癒される」。

上記の5地域の高校生と保護者（名古屋は除く）にこれらの評価語対により、鹿児島方言、博多方言、広島方言、大阪方言、京都方言、名古屋方言、東北方言、標準語、東北方言、札幌方言の9方言と標準語について評価してもらった。

これらの27語の評価語対に1点から5点までの点数をあてて、3点を中間点数とした。（例参照）

例 ぞんざい 1——2——3——4——5丁寧

点数の低い方がネガティブ評価で、点数の高いほうがポジティブ評価と考えることができる。また、3点は評価語対の中間点でどちらにも評価をしていないと解釈した。

これらの解釈を用いて調査結果を分析してみる。

3. 調査結果

3.1 方言の人気

ここで各方言に対する評価点合計と、評価点合計を評価対語数 27 で割った平均評価点の表を示しておくとなつてくる。

各方言に対する評価点合計と平均評価点

| | 評価点合計 | | 平均評価点 | |
|-------|-------|-------|-------|------|
| | 生徒 | 保護者 | 生徒 | 保護者 |
| 鹿児島方言 | 80.83 | 75.4 | 2.99 | 2.79 |
| 博多方言 | 80.37 | 80.56 | 2.97 | 2.98 |
| 広島方言 | 80.13 | 75.41 | 2.97 | 2.79 |
| 京都方言 | 97.26 | 94.67 | 3.63 | 3.51 |
| 大阪方言 | 86.95 | 79.23 | 3.22 | 2.93 |
| 名古屋方言 | 81.56 | 73.83 | 3.02 | 2.73 |
| 東京方言 | 91.15 | 89.19 | 3.38 | 3.30 |
| 東北方言 | 75.41 | 74.08 | 2.79 | 2.74 |
| 札幌方言 | 80.43 | 84.88 | 2.98 | 3.14 |
| 標準語 | 93.12 | 93.20 | 3.45 | 3.45 |

これをみると、京都方言が合計点、平均点ともに、標準語、東京方言よりも高く、最高点を取っていて、最低点は東北方言になっている。この表で見る限り、京都方言が日本の方言の中で一番人気がある方言ということになる。また、札幌方言と標準語を除き、各方言に対する評価では生徒の評価は保護者の評価よりも高いという点も興味を引く。また、最低点の東北方言も「嫌い-好き」の評価では3点以上であり、嫌われている訳ではない。

3.2 ふたつの方言タイプ（生徒の場合）

京都、名古屋、東京杉並、狛江、茨城、青森の生徒たちの各方言（9方言と標準語、以後、10方言とする）の評価の平均値をグラフに示すと、2つの方言グループに分かれることがわかる。すなわち、評価が明確な方言（図-1）と評価が曖昧な方言（図-2）がそれぞれである。明確な評価が行われた方言は総合評価

図1 評価が明確な方言(生徒)

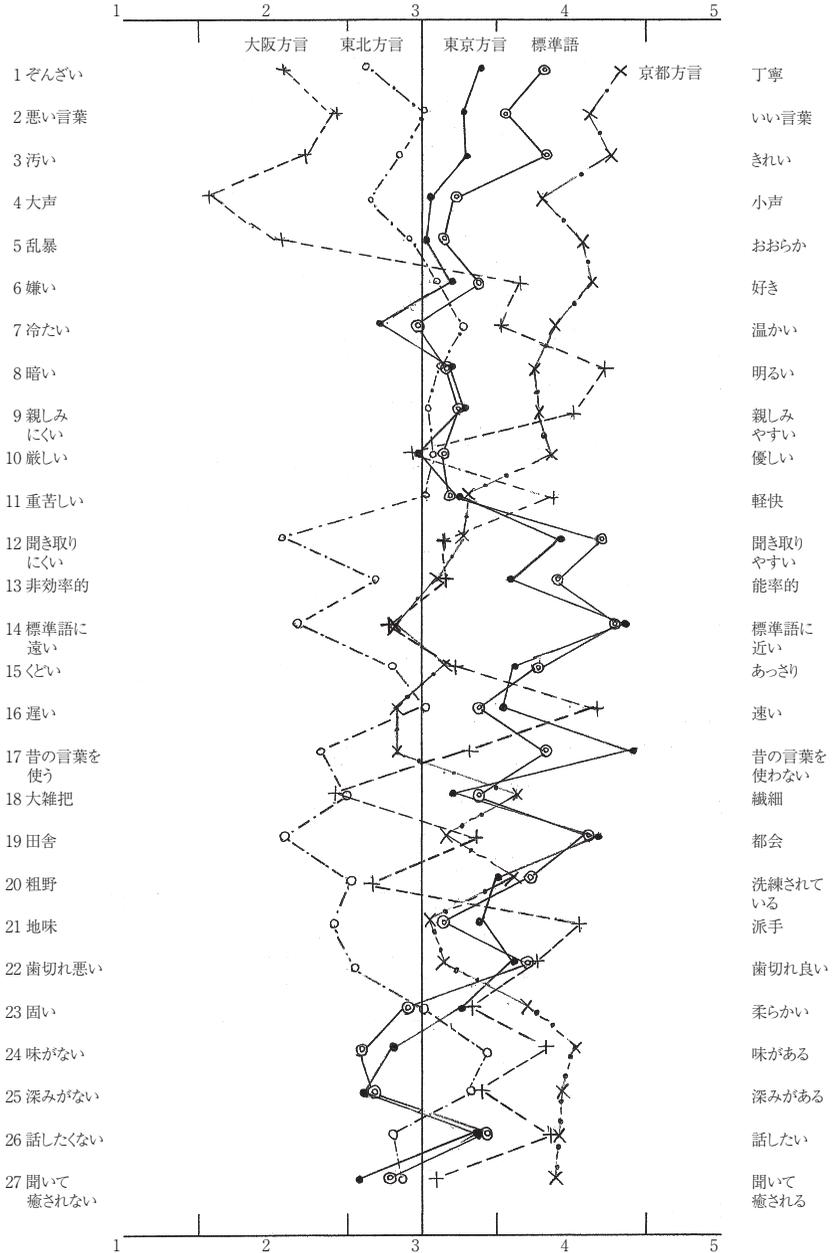
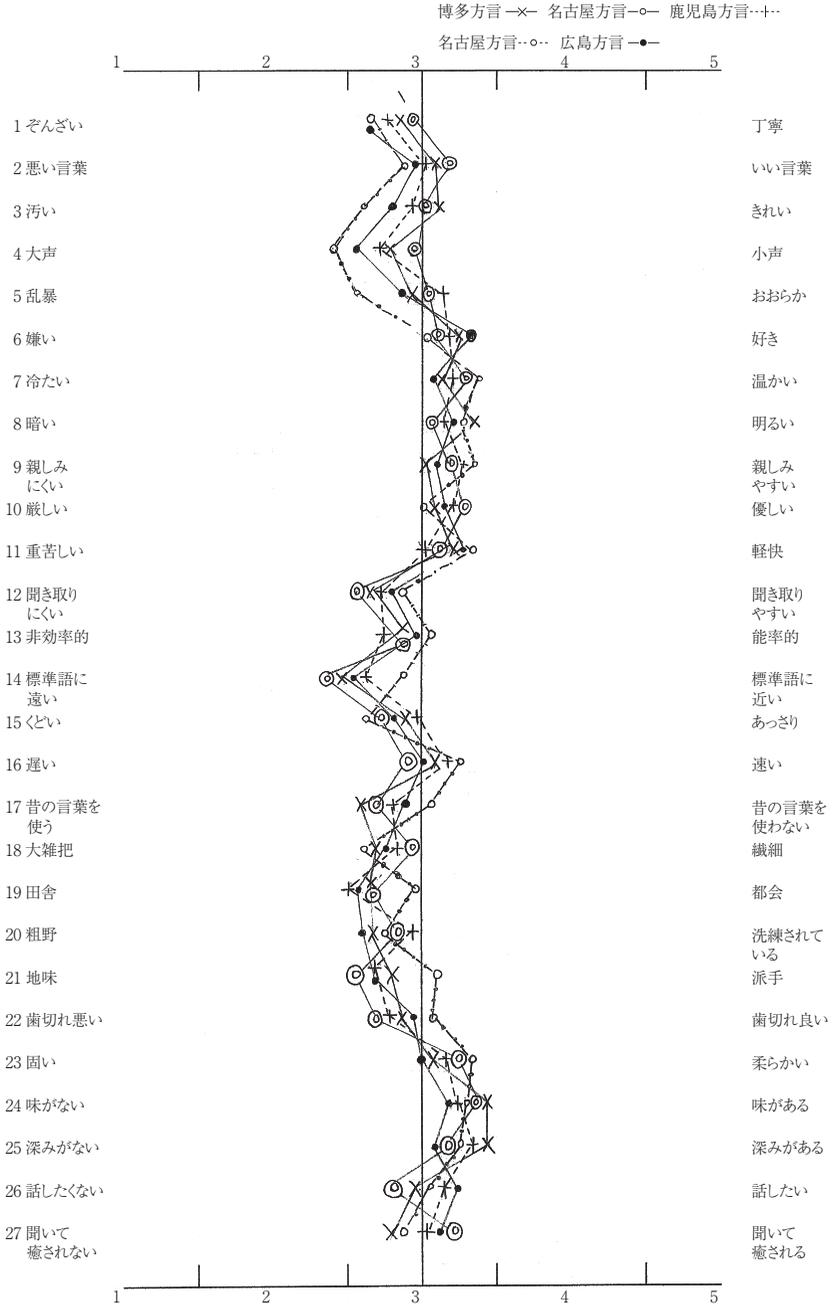


図2 評価が曖昧な方言（生徒）



の高低はあるが、各評価対語の評価がプラス・マイナスにはっきり分かれている方言である。それに対して、ほとんどの評価対語で2.5点から3.5点の間に入り、プラス・マイナスの評価が曖昧な方言が点ある。

3.3 評価が明確な方言と評価が曖昧な方言

京都方言、大阪方言、東北方言、東京方言と標準語はかなりはっきりした評価が行われた方言であり、各評価対に対して評価が明確で、グラフは左右のブレが大きく、評価がはっきり表現されている。それに対して、博多方言、鹿児島方言、広島方言、名古屋方言、札幌方言はグラフでは全体的に評価が曖昧でグラフは3点を中心にして、左右のブレがあまりない。このように2つのグループに分かれるのは、評価が明確な方言はマスコミなどでよく知られている身近な地域で話されている方言で、イメージを持ちやす方言であり、曖昧な方言は方言や方言が話されている地域があまり身近でないので、イメージしにくい、評価が曖昧になる方言といえる。このように、テレビなどマスコミに現れて、日常的に接している地域の方言にはイメージを持ちやすく、その逆は評価がイメージを持ちにくくなるといえる。評価が明確な方言は方言イメージのステレオタイプであり、評価が曖昧な方言はイメージの持ちにくさを表現していることになる。すなわち、これらのグラフは各方言のステレオタイプ度を表す指標であると解釈できる。

3.4 保護者の評価

生徒の方言評価でははっきり二つのグループに分かれたが、保護者の場合にも同じような結果が出ている。ただし、評価が明確な方言(図-3)は京都方言、大阪方言、東京方言、東北方言と標準語で、生徒の場合と同じである。また、曖昧な方言(図-4)は博多方言と札幌方言で、評価の明確な方言と曖昧な方言の中間に一部の評価が明確に行われている方言がある。鹿児島方言と名古屋方言がその中間的な評価の方言(図-5)と位置付けることができる。評価が明確な方言をステレオタイプとすると、周辺事例といえることができる。

このように中間的な方言の存在は方言イメージが明確なものと曖昧なものとの

図3 評価が明確な方言（保護者）

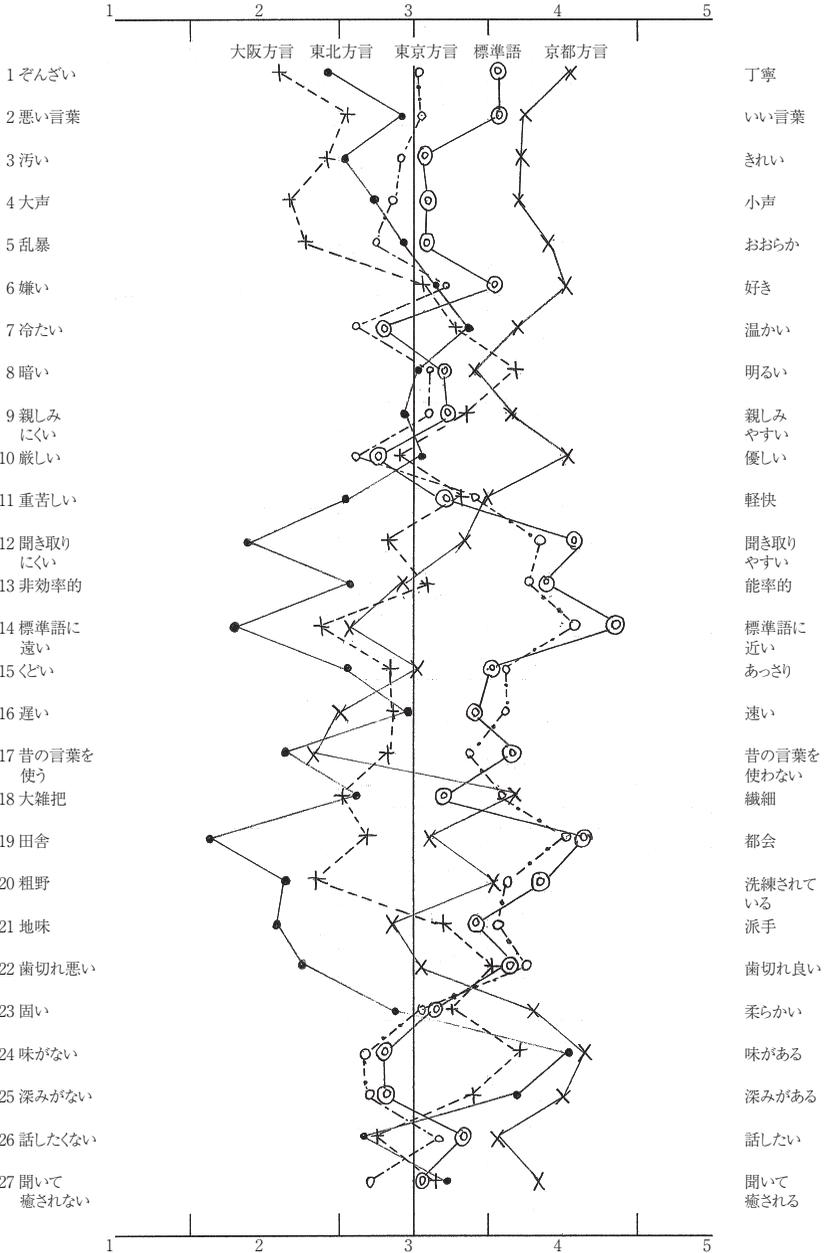


図4 評価が曖昧な方言（保護者）

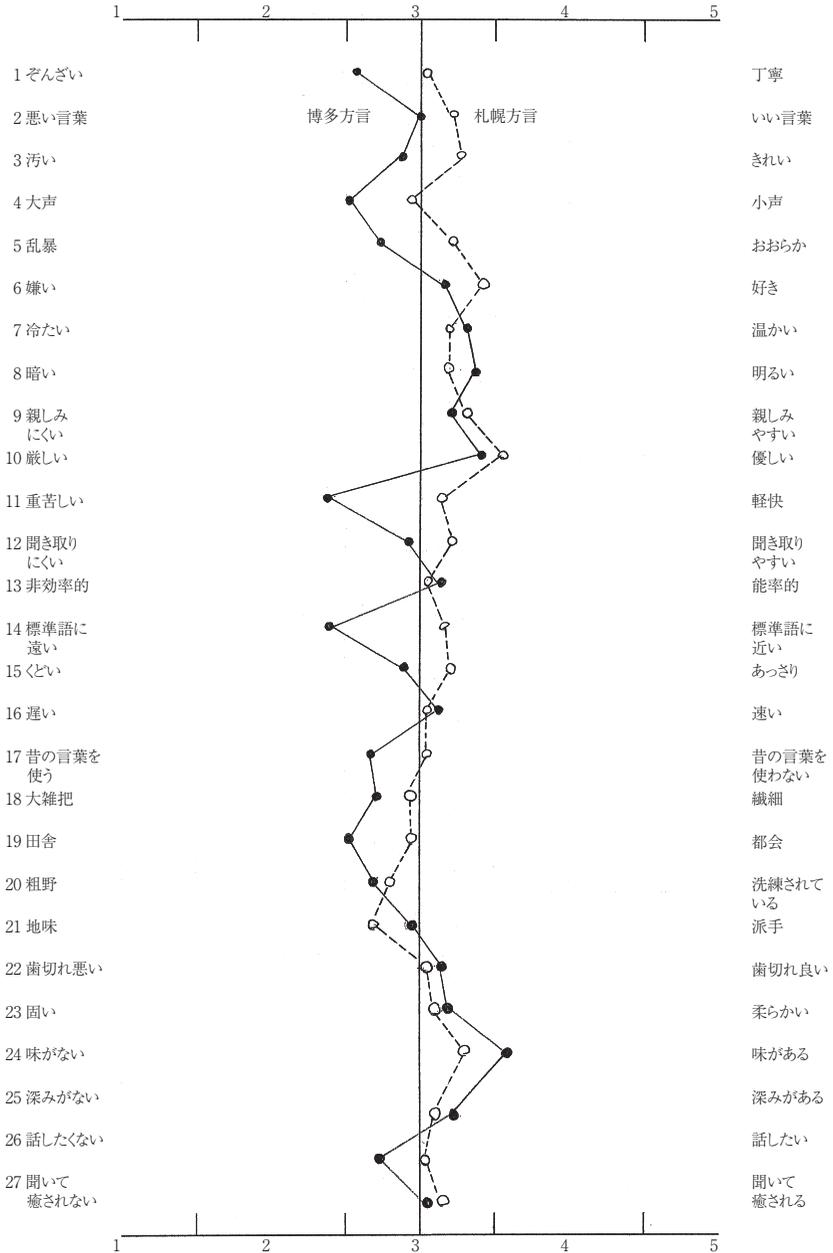
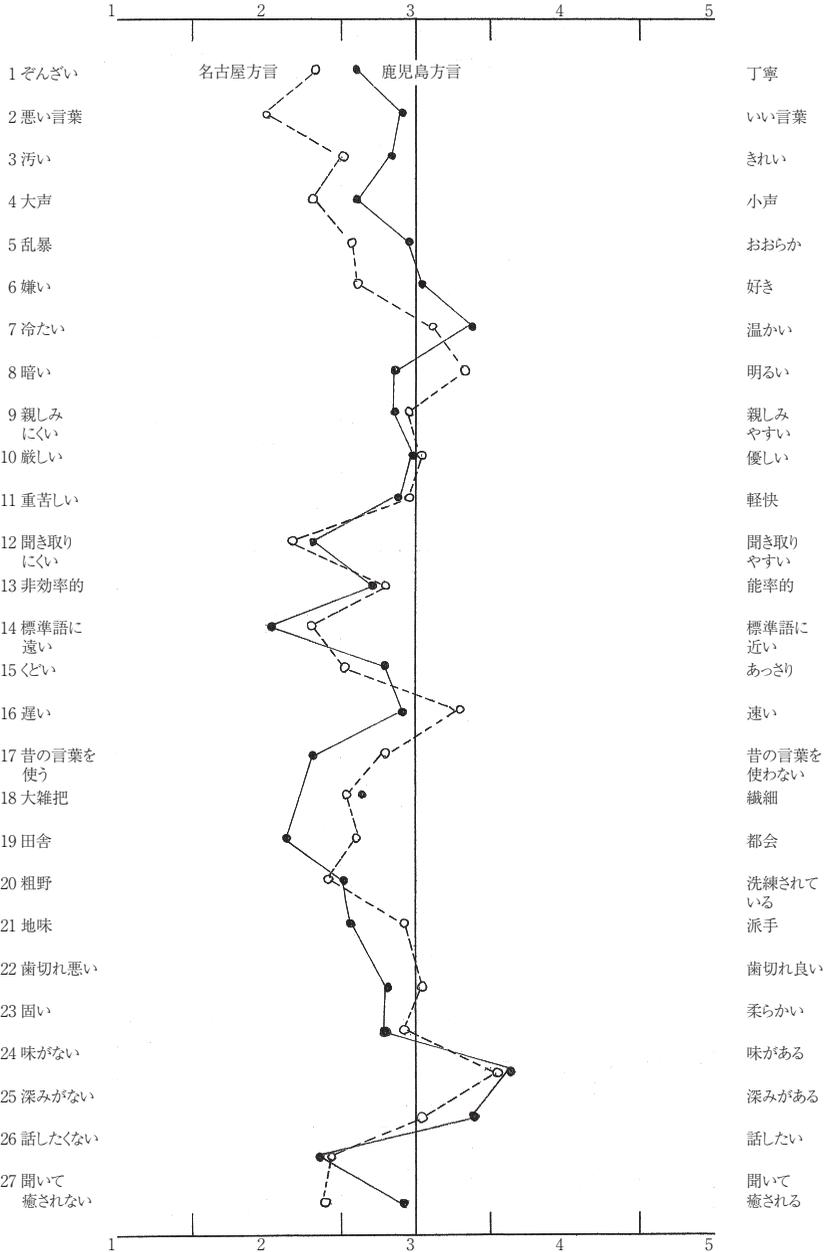


図5 評価が中間的な方言（保護者）



の二つのグループだけに分かれているのではなく、イメージの明確度は複数の段階に分けることができる。イメージが曖昧な方言でも、テレビのドラマなどでその地域や方言が報道され、知られてくると、だんだんイメージが鮮明になってくると考えられる。

3.5 個別方言の持つイメージ

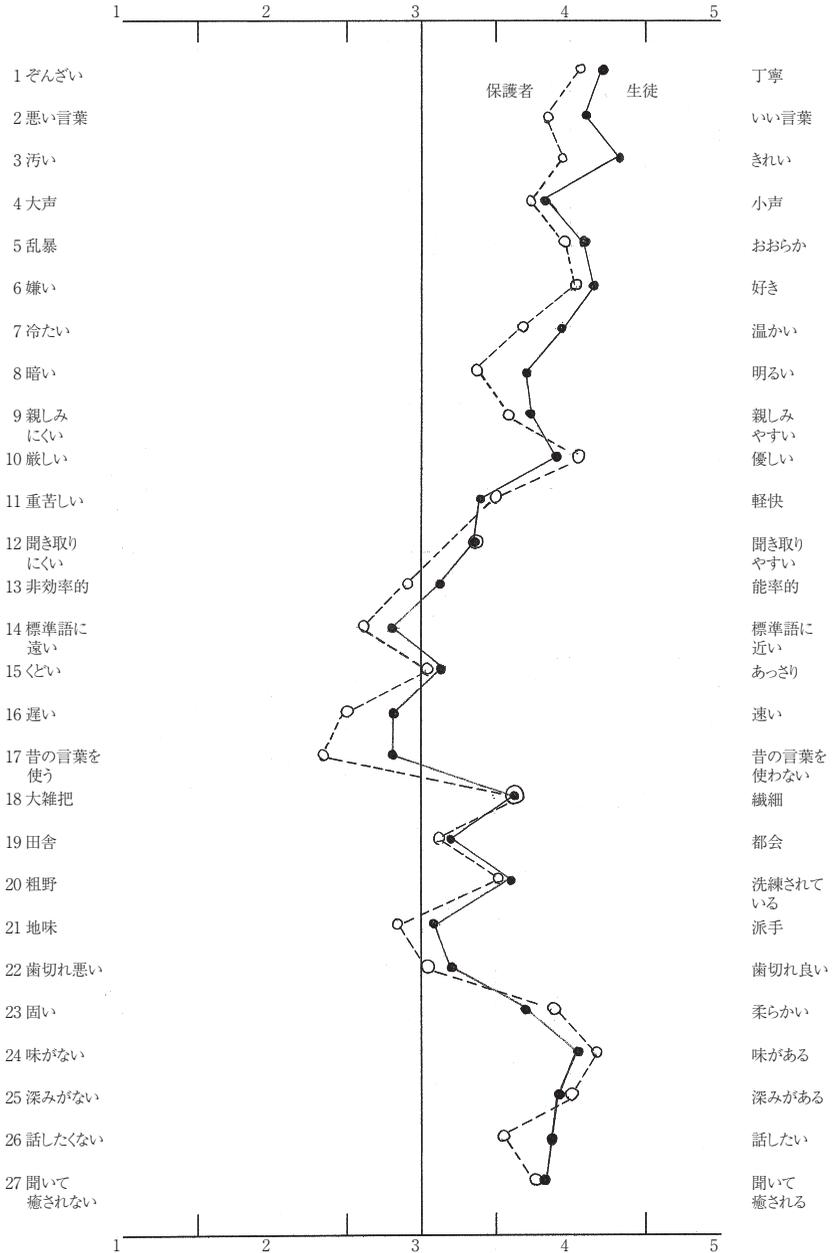
ここで扱った方言にはイメージが鮮明なステレオタイプとイメージが曖昧な事例があることがわかったので、イメージの明確な方言について、それぞれのイメージの特徴を検討してみる。生徒と保護者に共通なイメージが明確な方言は京都方言、大阪方言、東京方言、東北方言と標準語である。これらの方言の特徴を個別的検討してみる。

3.5.1 京都方言のイメージ（生徒・保護者）図-6

京都方言に対する各地の生徒・保護者の評価平均のグラフ（図-6）をみてみよう。まず、3.1で書いたように、京都方言は標準語よりも高い評価が与えられている。すべての評価対語で2.5点以上である。これらを概観すると、京都方言にイメージは「丁寧、きれい、おおらか、温かい、優しい、繊細、洗練されている、味がある、深みがある、話したい、癒される」が4点を超えている。

低い評価は「非能率的、遅い、昔の言葉を使う」の3語対だけである。これらをまとめると、京都方言は情緒的な側面で高いイメージをもち、効率性で低いイメージをもっていることがわかる。井上（1977）には共通の評価語対17、評価段階は7段階での調査があり、評価段階は今回の調査とは異なるが、情的な評価（本論文では情緒的評価9が高く、知的な評価（効率的評価）が低いという点で同じ傾向を示している。35年以上の隔りがあるのに、京都方言のイメージが同じ傾向であることはステレオタイプとしての京都方言のイメージがいかに堅固のものであることを示しているといえよう。また、一度作られたイメージは変化しにくいということが分かった。

図6 京都方言（生徒・保護者）



3.5.2 大阪方言（生徒・保護者）図-7

大阪方言の場合、保護者よりも生徒の評価が全般的高いのが特徴である。評価が高いものは「明るい、親しみやすい、軽快、速い、派手」、評価が低いものは「ぞんざい、悪い言葉、汚い、大声、乱暴」である。情緒的评价に高低はあるが、効率性については中間的评价が行われている。このような評価からイメージは声が大きく、乱暴であるが、明るく、親しみやすいという下町のイメージと結びついているといえる。井上（1977）の結果とも類似している。これらのことからかなり昔から大阪方言に対するイメージが確立されているといえることができる。また、京都方言に比べると、全体的に評価が低いことも同じ傾向を示しているが、方言のイメージは明確である。

3.5.3 東北方言（生徒・保護者）図-8

東北方言の場合は生徒と保護者の評価が一致している。全体的に評価が低くなっている。ほかの方言と比較しても全体評価合計点が一番低い。

特に、「聞き取りにくい、標準語に遠い、田舎」の評価が低くなっている。高い方では「温かい、味がある、深みがある、癒される」で高くなっている。これらのことから効率性は評価が低い、情緒性は評価が高くなっている。これらの評価には東北方言の発音や東北地方の地理的な条件などが関係していると考えられる。井上（1977）でも傾向は同じになっている。東北方言のイメージは聞き取りにくく、効率ではないが、温かくって、味がある方言であるということになる。このイメージも古くから持たれていた「みちのく」のイメージである。

3.5.4 東京方言（生徒・保護者）図-9

東京方言の評価が全体的に高く、マイナス評価がないといえる。強いえてあげれば、「冷たい、深みがない、癒されない」などが少しマイナスの評価である。プラス評価は「聞き取りやすい、能率的、あっさりしている、速い、都会、歯切れがよい」である。これらから

情緒はないが、能率的で歯切れがよいというイメージを持っていることがわ

図7 大阪方言（生徒・保護者）

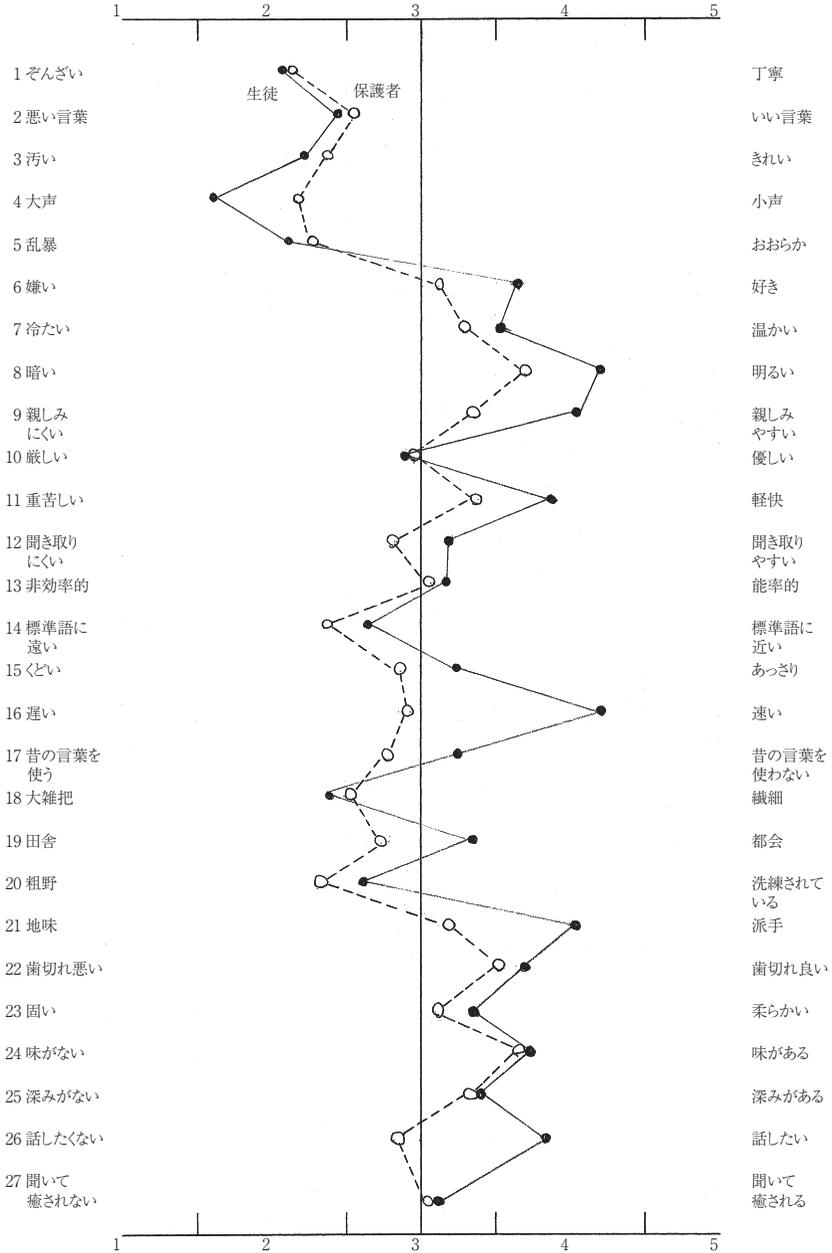


図8 東北方言（生徒・保護者）

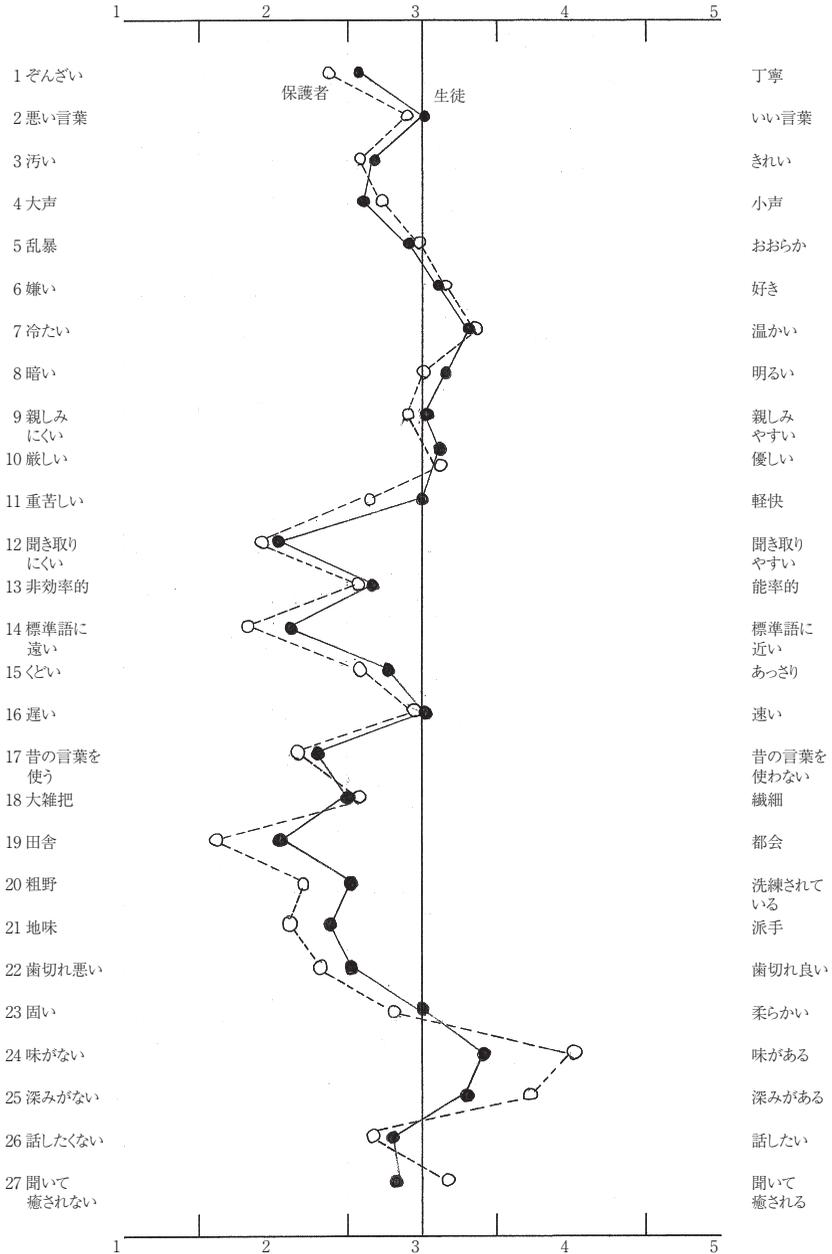
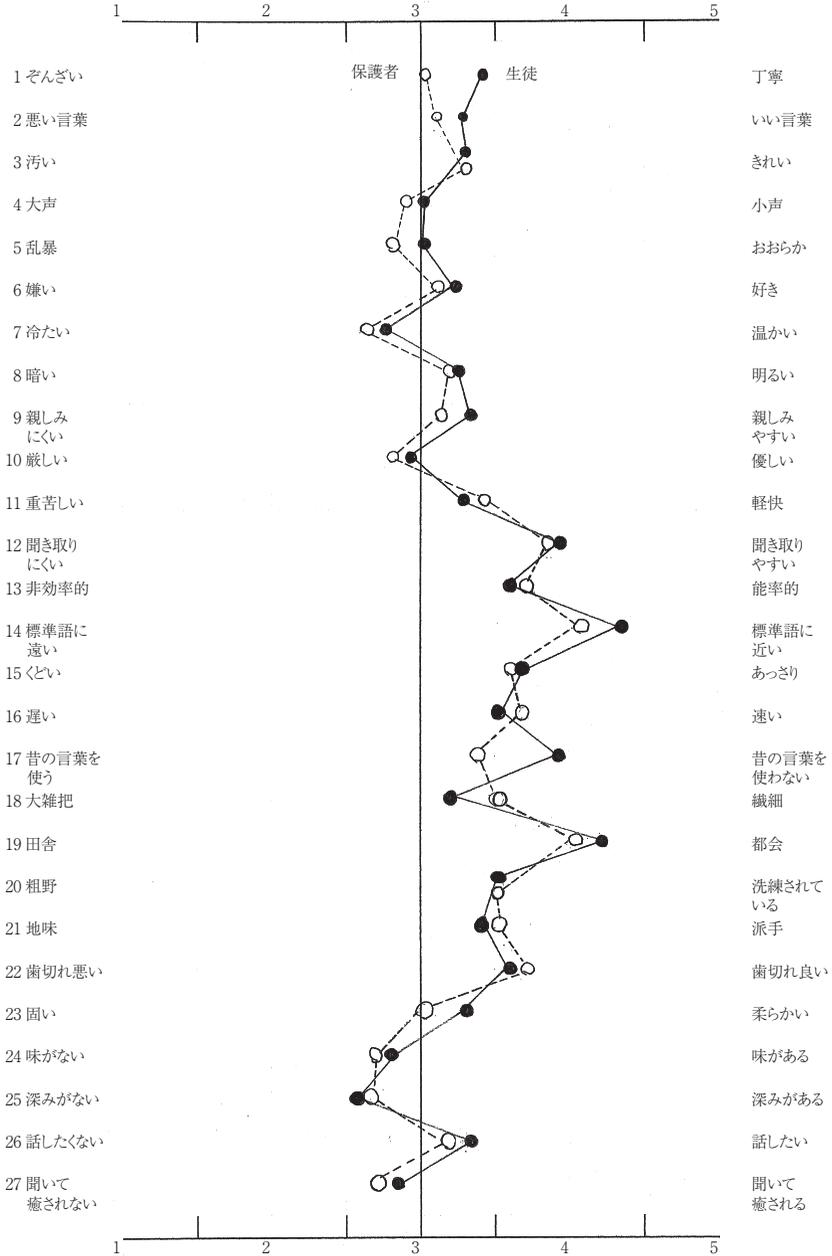


図9 東京方言（生徒・保護者）



かる。井上（1977）でも同じような傾向を示している。東京が文化の中心地であり、東京方言が共通語としての役割を持っていることを認めているということになるだろう。ただし、グラフは記載しないが、京都の生徒・保護者の東京方言についての評価はほかの地域の生徒・保護者よりも厳しい評価をしている。これは京都の人の持っている東京（東京方言）に対する対抗意識が働いているといえる。

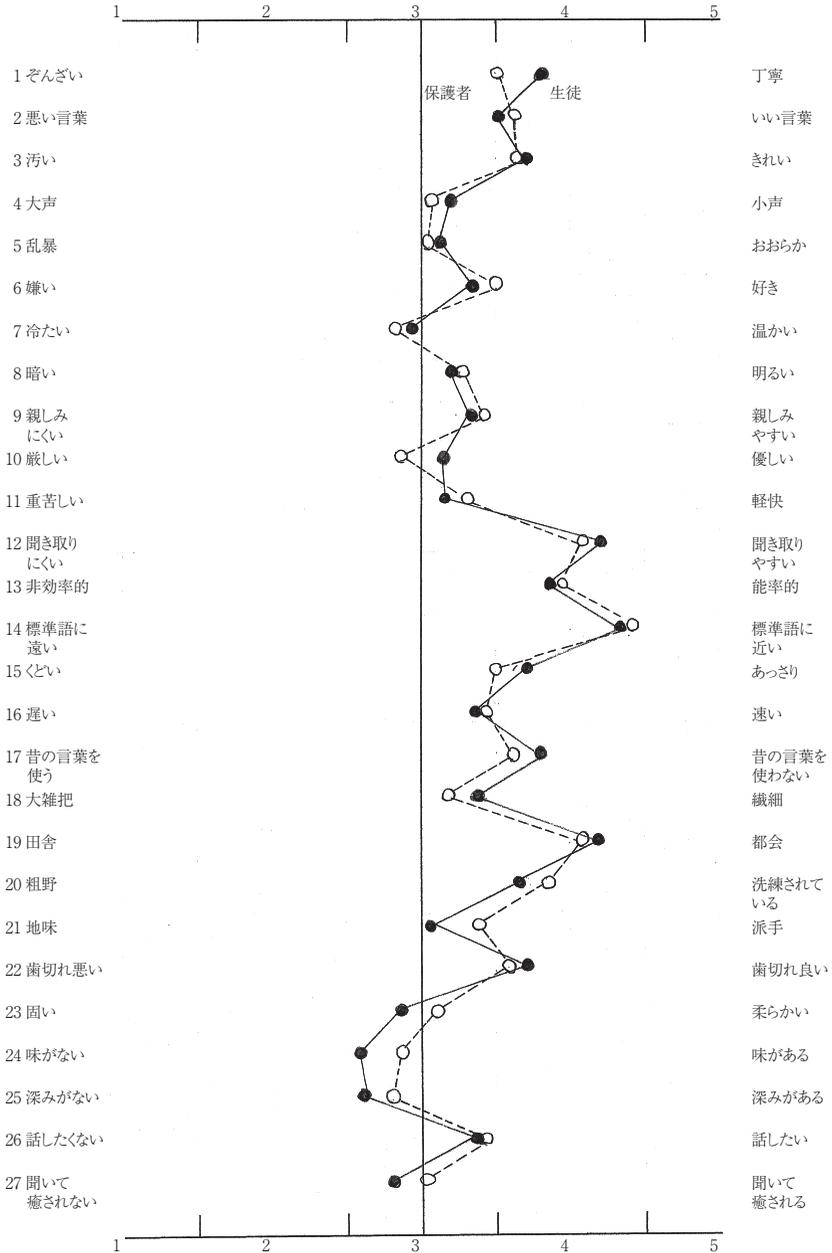
3.5.5 標準語（生徒・保護者）図-10

最後に標準語は全体的に評価が高い。特にプラス評価は「聞き取りやすい、能率的、標準語に近い、昔のことは使わない、都会、歯切れがいい」などである。これらの効率性の側面の評価がたかく、情緒的な側面についてはプラスの評価は与えられていない。標準語の評価傾向は東京方言と類似しているが、標準語にはマイナス評価がほとんどない。東京方言は実際に存在する方言に対して、標準語は理想の言語であり、実際の方言とは次元の異なった言葉として位置付けられているからであろう。イメージとしては効率性が要求され、情緒的な側面は要求されていないようである。それは方言と違って、標準語は改まった場面で使われることが期待される、規範性の高い言語であり、コミュニケーションがうまく行えるための言葉として期待されているからであろう。

4. まとめ

全国の主な方言の持っているイメージについて考察してきたが、その結果、明確なイメージを持つ方言と曖昧なイメージを持つ方言があることが分かった。それはその方言が話されている地域や文化の知名度と関連するものであろうことが推察できる。京都方言は昔の文化の中心地の言葉として全国的に評価が高く、大阪方言は庶民的な方言として評価されている。また、東北方言は発音の特徴や東北の地域性や人間性によってイメージが作られていることが分かった。また、方言のイメージは必ずしも、方言の言語的な特徴と関係があるとは限らない。むしろ、その方言の話されている地方の文化や歴史などにより作られているのである。これらのイメージは一度作られると年月が経っても変化

図 10 標準語 (生徒・保護者)



しにくいことが分かった。このことは各地の方言の内容が変化したとしても、そのイメージはなかなか変化しないということが先行研究との比較で分かった。将来にわたって、全国的に方言が使われなくなったとしても、一度作られた方言のイメージは変化しにくいことも理解できる。ステレオタイプとしての方言イメージは一人歩きしているのである。

参考文献

井上史雄 1977 方言イメージの多変量解析（上・下）言語生活 8、9月

井上史雄 1980 方言のイメージ 言語生活 5月号

（専修大学文学部教授）

この研究は専修大学 2011 年度の国内研修の成果として発表します。